

## はしがき

新潟県の生んだ先駆者たち、特に思想家については、以前から興味をもっていた。ただ、それを一冊の著書にまとめてみようと考えたのは、ごく最近のことである。

以前、山形県庄内地方の大学に関係していたときに、『公益の種を蒔いた人びと——「公益の故郷・庄内」の偉人たち——』（東北出版企画、二〇〇七年）を上梓したことがあった。山形県のすずめと、庄内を離れる置きみやげのような気持とからごく短い期間で書き上げた著書であった。

その際、いずれ機会があつたら、新潟県の生んだ先駆者・思想家のことも書いてみたい、と思ったりもした。その後、勤務先の白梅学園の機関誌『地域と教育』に保育園の先駆者・赤澤鍾美あつとみの小伝、五泉市の地域紙『五泉市民新聞』に、五泉市とその周辺出身の人物として式場隆三郎と吉田東伍の小伝を書いたことはあつた。その後、多忙さの中に、この課題については棚上げになり、筆を執ることはなくなった。

しかるに、たまたま昨年の夏以降多少時間的余裕ができた時に、私自身の年齢を考えると、この機会を逃すと次の時間的ゆとりがいつやってくるか分からないので、未処理の課題を一つずつ処理することにした。その限られた時間で、最初に取り組み、書きあげたのが今回の七人の生涯と思想である。

よく知られた人は避けて、優れた業績があるのに、一般には周知されていない人や正確に理解され

ていない人に絞った。よく知られた人も含まれているが、その場合は専門家の間にも未解明の点の目立つ人に限った。この点は上述の庄内地方の人物を取り上げた時も同様の姿勢であった。

今回取り上げた七人にある程度共通することは、新潟の幼年時代に郷里とのつながりを強く意識させられていること、またその時代に自分の将来に向けて夢なり目的意識なりを持ち始めたことである。新潟といっても、地域によって環境も状況も一つではないが、七人はいずれも北方の雪国という厳しい条件を共通に背負って育った。そして、そのような郷里との絆を意識しつつ、将来に向けて作家、歌人などの夢・大志を抱くようになったのである。

それだけに、七人とも雪国の新潟時代を抜きにはそれぞれの生涯も、また思想形成も、語るべきでない人たちである。それに、多くが若くして結果・成果を出すなど早熟であったことも、印象深く心に焼き付いている。

今回、その七人の他に執筆対象として念頭に去来した人たちには、先の赤澤、式場、吉田の他には、稲村隆一・順三、内山愚童、江部鴨村、大倉喜八郎、大関松三郎、西脇順三郎、前島密、牧口常三郎たちがいる。ただ今回は七人で予定の紙数を優に超えてしまったので、諦めざるをえなかった。次の機会があれば、女性も是非取り上げたいと思っではいるが、残念ながら適任者が容易には浮かばなかった。

いつものことながら、執筆する以上、従来不十分だった点、未解明であった点、誤って理解されてきた点等にも力点を置くので、やや専門的に過ぎる部分も出ているのではないかと心配している。

また、一章ごとに独立してまとめているので、相馬御風、小川未明、大杉栄らのように、横のつながりの強かった人たちに関しては、同じ話題・同じ議論を取り上げる必要も出てくる。その際は、若干の相違を際立たせる程度で、重複を厭わずくり返し同じ説明を行ったところがある。

このような小著でも、完成するまでには多くの人たちや図書館・資料館・古書店のお世話になった。いちいち名前は記さないが、そのような多くの人たちの御教示・御支援なしには、本書の上梓はかなわなかった。お世話になった皆様には心から感謝を申し上げる次第である。

これまで、編者を務めた著書を含めると、私は一〇冊以上の著書・編著を論創社のお世話になってきた。今回もまた同社のお世話になることになった。特に今回は内容や文章全体にわたって丁寧なご教示を頂いた。同社社長の森下紀夫さんのご厚情に心から御礼と感謝を申し上げます。

私は自分では新潟県の出身と思っているが、新潟のことに関しては狭く浅い知識・情報しか持ち合わせていない。むしろ知らないことの方が多い。それだけに、新潟の研究に専門的に打ち込んでいる人、新潟に長く住んでいる人からみたら、誤っていること、不十分なこと、あるいは偏っていることも少なくないと思う。それらについてはご教示・ご指導を頂ければ幸いと願っている。

二〇一六年四月

小松隆二



新潟が生んだ七人の思想家たち  
目次

相馬御風——早稲田大学校歌の作詞者で地方から俯瞰・発信した思想家

- はじめに——地方生活者として文化・文学を発信し続けた人 2
- 1 新潟・糸魚川での誕生、成長、そして上京 5
- (1) 糸魚川での成育、そして東京へ 5
- (2) 高田中学から早稲田大学へ 7
- (3) 早稲田大学卒業と文芸への道 10
- 2 早稲田大学校歌の作詞 12
- 3 評論・思想の世界へ 15
- (1) 大杉栄との交流・論争——『近代思想』への接近 15
- (2) 大杉・御風論争の開始と展開——歴史に残る紳士の結末 17
- (3) 大杉・御風論争の意味 22
- (4) 「カチューシャの唄」の大ヒットと抱月の死 25
- (5) トルストイへの傾倒 28
- 4 東京を捨てて故郷・地方へ 30

	(1) 活躍でき、好きでもあった東京からの離脱	30
	(2) 東京と訣別し糸魚川へ	34
5	郷里・糸魚川での活動と発信	37
	(1) 地方の良さの再認識	37
	(2) 良寛と児童物への傾倒、そして地方生活への感謝	39
6	戦時体制の進行、敗戦、そして終焉	43
7	御風の業績と評価	47
	おわりに	53
	(1) 御風と糸魚川	53
	(2) 御風の到達した境地	57
<b>小川未明</b>	—— 童話を通して子どもと社会に向き合った思想家	
	はじめに—— 脳裏に焼きつく木枯らしと荒波の光景	66
1	小川未明の誕生と成長	70
	(1) 北方の地での誕生、成長、そして上京	70
	(2) 早稲田大学入学と文芸活動	74
	(3) 早稲田大学の卒業と作家への道	77

2 社会思想・社会運動への傾斜 81

(1) 『近代思想』への接近、社会主義への対応 81

(2) 環境への関心 83

3 一九二〇年代の活動とアナキズムへの傾斜 86

(1) 童話宣言 86

(2) 『悪い仲間』と『矛盾』への参加 88

4 戦時下の小川未明の足跡と苦渋 92

5 小川未明の戦後の復活と終焉 95

6 小川未明の業績と評価 98

おわりに 104

市島謙吉（春城）——「随筆王」「早稲田大学四尊」と評価される大学人

はじめに——早稲田大学・図書館学・政治学の先導者 112

1 市島謙吉の誕生と成長 115

2 東京での生活と活動——東京の学生生活 120

(1) 東京大学入学と学生時代の活躍 120

(2) 家業不振、謙吉の東大中退と政治への接近 124



3 政治参加の機会の到来、しかし中道で断念 129

4 市島謙吉の終焉 133

(1) 謙吉の晩年と最期 133

(2) 頑張り屋で、世話好きの謙吉 136

5 市島謙吉と新潟とのつながり 138

6 市島謙吉の業績と評価 143

おわりに 154

## 土田杏村——優れた在野の自由人思想家

はじめに——自由大学運動の先導者 162

1 土田杏村の誕生、成長、そして自立・結婚 166

(1) 誕生、高等師範への入学、哲学の論争へ 166

(2) 京都帝大への進学と結婚 169

2 大正デモクラシーのうねり 171

(1) 大正デモクラシー下の杏村の活動 171

(2) 信州・上田に始まる自由大学運動 174

(3) 大正末から昭和期にかけての杏村の関心——環境、社会奉仕、童話文学 178

3 大杉栄、そして労働運動への関心——批判と共感と 181

(1) 大杉栄と杏村 181

(2) マルクス主義批判 184

4 大正デモクラシーの挫折と昭和の時代 187

(1) 一貫して改造をめざし、その根底に教育を位置付ける 187

(2) 晩年の関心事となった童話文学 190

5 終焉、そして生涯の業績と評価 192

おわりに——杏村の人柄 197

大杉 栄——人間尊重の永遠の革命家

はじめに——人間重視の視点からロシア革命を否認 204

1 大杉栄の誕生、郷里、先祖の地 207

2 陸軍幼年学校入学——名古屋へ 213

3 東京における自由な修業時代——外国語学校と自由な学び 215

4 社会主義、そしてアナキズムへ 219

5 『近代思想』の船出——社会主義運動の再開ののろし 221

(1) 『近代思想』の創刊と大杉の成長 221

	(2)	御風、哀果、陽吉らへの大杉栄の批判	224
	(3)	大杉栄と御風の論争の開始と終了	227
	(4)	民衆芸術・美術論と労働者が主役の主張	231
	(5)	大杉栄の感想詩の力	234
	(6)	自由恋愛とアナキスト宣言	237
	6	労働運動へ	240
	(1)	『労働運動』の創刊と知識階級批判——労働組合は理想社会づくりの実験場	240
	(2)	労働運動の精神と実践	243
	(3)	再度の日本脱出と国際的連携への関心	246
	7	関東大震災と大杉栄らの虐殺	248
	8	大杉栄の業績と評価	251
		おわりに——大杉への新たな期待	259
		<b>小林富次郎——法衣をまとい公益をかざした経営者</b>	
		はじめに——企業活動に公益の原理を導入	268
	1	小林富次郎の誕生、そして成長	271
	(1)	小林富次郎の誕生と故郷・柿崎	271

	(2) 故郷を離れ、与野へ——自立と挑戦に向けて	274
2	小林商店の創業と発展——ライオンの出発と社会貢献企業の形成	277
	(1) 小林商店の創業	277
	(2) 私益と公益を調和させる会社経営の工夫	279
3	海外出張と海外進出——欧米、ついで東洋旅行	282
4	小林富次郎の終焉	285
5	小林富次郎と公益活動	288
	(1) 小林富次郎の公益をめぐる到達点	288
	(2) 慈善券付き歯磨粉運動の意義——慈善・公益の大衆化・日常化	290
	(3) 富次郎の公益・社会貢献と社会の目	293
6	小林富次郎の業績と評価	296
	おわりに	303
	<b>本間俊平——「左手に聖書・右手にハンマー」を持つ採石場経営者</b>	
	はじめに——迷える青年に向き合った「秋吉台の聖者」	308
1	本間俊平の誕生と成長	312
	(1) 本間俊平の郷里と小学校時代	312

	(2) 学校を退学し、大工の道へ	314
2	受洗、再婚、そして秋吉台へ	317
	(1) 受洗、留岡幸助との出あい、そして秋吉台へ	317
	(2) 秋吉台での苦難と信仰の日々	319
	(3) 秋吉台に移住した頃のパイオニア精神	322
3	青少年の社会復帰と伝道のために全国を駆け巡る	325
	(1) 大理石事業・更生保護事業の進展と社外への俊平の影響	325
	(2) 関東大震災による打撃と健康の悪化	328
4	本間俊平の終焉	330
	(1) 最期の力を振り絞っての全国行脚	330
	(2) 妻の死と俊平の最期	332
5	本間俊平の業績と評価	335
おわりに		341



新潟が生んだ七人の思想家たち





相馬御風——早稲田大学校歌の作詞者で地方から俯瞰・発信した思想家



はじめに——地方生活者として文化・文学を発信し続けた人

新潟県の生んだ社会思想家の中では、相馬御風（一八八三～一九五〇）は、地方を拠点とする独特の生き方をし、また一三〇余の著作をはじめ、他に劣らぬ秀でた足跡・業績をいくつも残した思想家として忘れられない。

御風といえば、早稲田大学校歌「都の西北」、「カチューシャの唄」（島村抱月との合作）、童謡「春よ来い」等の作詞者として、また良寛の研究者として、さらに地方に拠点を置き、地方生活を享受しつつ、地方から俯瞰・発信を続けた人としても知られている。それも、大都会や中央に生活したまま地方の側に立つのではなく、また、たまたま以前から地方に生活していたので地方の側に立つのではなく、意識して東京を捨てて郷里・地方に戻り、その地を生活拠点、終の棲家に定めなおしての地方からの俯瞰・発信であった。その点が特に留意されてよい。

御風のことでは余り知られていないことで、留意すべきことに、アナキスト・評論家・思想家で、同県人の大杉栄との論争がある。御風が東京を捨てる直前に展開されたもので、外見ではその実相が分かりにくかった。御風が東京を捨てたのは大杉の厳しい批判のせいであるなどといった、これまで考えられてきたほど、実は、二人の論争は、後味の悪い形で終わったのではない。むしろ正々堂々と渡り合い、最後は認め合い、譲り合って幕引きとなっている。議論の推移や内容も、また結末

も、従来言われてきたこととは異なり、ある意味では思想史・運動史にも記録すべきさわやかな展開で終わったのである。

御風は、同郷の童話作家・小川未明とは同世代で、高田中学校でも、早稲田大学でも、同時期に学び、交流も、信頼関係も篤かった。お互いに相手抜きには、それぞれの活動や思想も語れないほどである。

二人は早熟で、早期に才能の一端を開花させ、注目されたもの同士でもあった。若い時から良きライバルであり、またエールを送り合う良き支援者同士でもあった。本書で取り上げた同じ早稲田大学関係者の一人である市島謙吉は、大先輩として御風らにもよく目をかけてくれた。

御風の早熟の例として、まず彼の最初の著書の出版が二二歳の時であったことがあげられる。そして早稲田大学校歌の作詞を大学卒業の年に依頼され、発表されるのがその年の秋、二四歳の時であったことにも驚かされる。校歌の歌詞にみられる理想の高さと現実への厳しい眼、思想の円熟ぶり、全体のスケールの大きさなどは、二〇代前半の青年が創り出した詩とはとても思えないほどである。

実際に、「都の西北」は、その雄大なスケールの詩と曲によつて、卒業生のみか、多くの人たちによつて愛唱され続けている。この詩一つだけでも、永く名の残る人である。

御風は、活躍しているさ中に、外見的には突然、捨てるように東京を離れ、郷里・糸魚川に「還元」した。以後、生涯をその地で過ごす。帰郷と共に発表した『還元録』（春陽堂、一九一六年）にみられる東京およびそこの自らの処し方に対する厳しい自己批判の姿勢とは異なり、糸魚川に戻つてから

小松 隆二（こまつ・りゅうじ）

[所属] 白梅学園、慶應義塾大学（名誉教授）、日本ニュージーランド学会、現代公益学会、社会政策学会、他。

[主要著作・活動] 『企業別組合の生成』（お茶の水書房、1971年）、『社会政策論』（青林書院、1974年）、『理想郷の子供たち—ニュージーランドの児童福祉—』（論創社、1983年）、『難民の時代』（学文社、1986年）、『大正自由人物語』（岩波書店、1988年）、『イギリスの児童福祉』（慶應義塾大学出版会、1989年）、『現代社会政策論』（論創社、1993年）、『ニュージーランド社会誌』（論創社、1996年）、『公益学のすすめ』（慶應義塾大学出版会、2000年）、『公益の時代』（論創社、2002年）、『公益とは何か』（論創社、2004年）、『公益のまちづくり文化』（慶應義塾大学出版会、2005年）、『公益の種を蒔いた人びと—「公益の故郷・庄内」の偉人たち—』（東北出版企画、2007年）、他。  
『大杉栄全集』編集委員（現代思潮社、1963～65年。ばる出版、2014～16年）、『下中弥三郎労働運動論集—日本労働運動の源流—』監修（平凡社、1995年）、他。

## 新潟が生んだ七人の思想家たち

---

2016年8月15日 初版第1刷印刷

2016年8月20日 初版第1刷発行

著者 小松隆二

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル（〒101-0051）

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1546-6 ©2016 Komatsu Ryuji, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。